

寺子屋方丈舎は、学校外の子どもの学びの場所として1999年に設立したフリースクールです。現在、7歳から21歳までの若者を受け入れています。

子どもを受け止める親のために (6)

特定非営利活動法人 寺子屋方丈舎 大関 勇気

「子ども第一主義」

「学びをつくるのは子どもと一緒に」

寺子屋方丈舎では、不登校への理解を自分たちの視点だけではなく、専門以外の人から視点を入れて、定期的に勉強会を行っています。3月14日行われた勉強会では、「こおりやま子ども若者ネット」代表鈴木綾さん



をお迎えし、ことにも合った居場所づくりについて学びました。参加者と対話をしながら進められましたが、大きなテーマとしては次の3つでした。

- ① 不登校で誰が困るのか？
何に困るのか？
- ② 不登校の議題は何か？
- ③ 不登校の議題を解決するには？

不登校になってから傷つく

この勉強会で私が気づいたのは、子どもは「不登校になってから傷つく」ことでした。それは社会の見え目、不登校という表現が子どもや家族を追い詰めるということです。私たちは、学校にいかないことを無意識に「悪いこと」として表現しています。

「自分を隠さない」という行為を大人が子どもに求めてしまうので、

本人や家族は「学校にいかない」ことを人に言えません。彼らの「ウソ」はつぎたいのではなく、「学校にいかない」と正直に言えば誰もが否定する社会で本当のことは言えません。問題は社会にあります。

フリースクールでは、「あるもの」を肯定してゆく

子どもは誰もが幸せになりたい。しかし、不登校の子どもはフリースクールに通っていても、学校に通っていない自分を自分で責めています。フリースクールでは、本人を全面的に肯定し、受け入れられます。否定せずに子どもがお互いにコミュニケーションを重ねます。

肯定されると緊張が和らぎ、リラックスします。自分で表現することも、はじめます。私たちは、子どもの内面にあるものを引き出します。自分の中にある部分を、肯定されることがとても大事なのです。

学校では、知識をどんどん増やす。明るく、元気を求められます。正しい正解が大事です。たとえそれが1日だけの短期的な記憶であっても、「テストさえクリアすればいい」と大人は言います。学校に通っているのに不安

を感じる子どもは、この短期的な記憶をテストで調べられることが、成長しているという実感につながっていません。

「ありのまま」の自分を否定して、大人が望む「子ども」を演じなければならぬ。学校に通う子ども、不登校の子ども、同じところで社会がエネルギーを奪っています。考えなければならぬのは私たち大人の「学び」への思いです。個人のあり方や考え方もつと尊重されなければ、社会に対して、自分が貢献しているという実感さえも持てません。子どもの「あり方」全てを受けとめてください。

